

SAN NOU
山 王 4

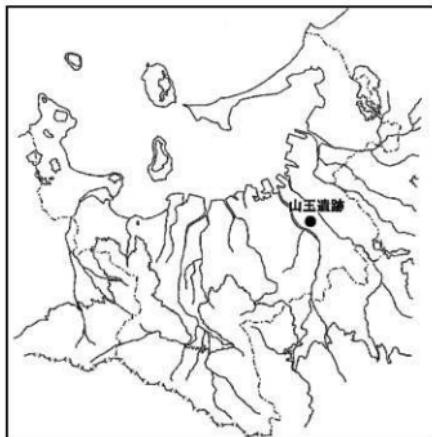
— 山王遺跡第5次調査報告 —

2010

福岡市教育委員会

SAN NOU
山 王 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1076集



調査番号 0823
調査略号 SNN-5

2010

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。

そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区山王2丁目において発掘調査を実施した山王遺跡第5次調査の記録を収録したものです

調査の結果、弥生時代から中世にかけての集落が確認され、長きにわたって本地域が發展し続けた事を示す良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社コマーシャル・アールイー様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

1. 本書は株式会社コマーシャル・アーライーが実施した博多区山王2丁目25-9番地内において民間開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課が平成20年度に実施した山王遺跡第5次調査の調査報告書である。
2. 発掘調査と整理報告書作成は共同住宅建設に伴う受託事業として行った。
3. 本書で用いる方位は旧国土座標第2系による座標北で、磁北はこれに6°西偏する。
4. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、堅穴住居→SC・不定形土壙→SX・非戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
7. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子による。
8. 製図は井上加代子・米倉法子による。
9. 本書に用いた写真は加藤による。
10. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
11. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
II.調査の記録	5
1 調査の概要	5
2 弘生時代の調査	6
3 古墳時代の調査	12
4 中世の調査	13
IV.小結	16

挿図目次

Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig.2 調査区位置図(1/4,000)	2
Fig.3 調査区周辺測量図(1/500)	3
Fig.4 遺構全体図(1/100)	4
Fig.5 SC03・SX02・SD01・04・SK08他実測図(1/60・1/40・1/20)	7
Fig.6 SC03・SX02出土遺物実測図(1/3)	8
Fig.7 SD01・04他出土遺物実測図(1/3・2/3)	10
Fig.8 SD06・SK07実測図(1/40)	12
Fig.9 SD06他出土遺物実測図(1/3)	13
Fig.10 SE10・SK09・11・SD05実測図(1/60・1/40)	14
Fig.11 SE10・SK09・11・SD05他出土遺物実測図(1/3)	15

写真目次

Ph.1	調査区周辺（南西から）	5
Ph.2	調査区南部全景（南西から）	5
Ph.3	調査区北部全景（南西から）	5
Ph.4	SC03・SD04・SX02（南西から）	6
Ph.5	SC03 土層断面（北から）	6
Ph.6	SC03 土器出土状況（南から）	9
Ph.7	B4・SP05 石剣出土状況（北から）	10
Ph.8	弥生時代出土遺物	11
Ph.9	SD06（左）・SK07（右・南西から）	12
Ph.10	SD06 土器出土状況（西から）	12
Ph.11	SE10（左）・SK09（右・北から）	13
Ph.12	SK11 土層断面（北東から）	13
Ph.13	SD05（北東から）	14
Ph.14	古墳時代・中世の出土遺物	16



調査区全面(南西から)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区山王3丁目59-9において、株式会社コマーシャル・アールイーより共同住宅建設設計画の策定に当たって、平成20年6月10日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は311.40m²、受付番号は20-2-200である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が山王遺跡の範囲内であり、内容など状況を把握するため同年6月19日確認調査を実施し、その結果表土下10~20cmで弥生時代の竪穴住居・溝・柱穴など多くの遺構を検出した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。よって遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、調査に関する同社と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成20年7月9日に着手、同年8月5日に全ての行程を終了した。

調査番号	0823	遺跡略号	SNN-5
調査地地籍	博多区山王3丁目59-9	分布地図番号	37（東光寺）0127
開発面積	311.4m ²	調査実施面積	162.34m ²
調査期間	080709~080805	事前審査番号	20-2-200

2. 調査の組織

【調査委託】 株式会社コマーシャル・アールイー

【調査主体】 福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】 文化財部長 矢野三津夫（当時） 埋蔵文化財第1課長 山口讓治（当時）
調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】 文化財管理課 古賀とも子(20年度) 山本朋子 (21年度)

【発掘調査】 加藤良彦

【発掘作業】 浦 伸英 中村尚美 今村由利 北野宏行 崎山幸義 米良恵美 元澤慶寛
安高邦晴 中野紳子

【整理作業】 国武真理子 齋田 慧

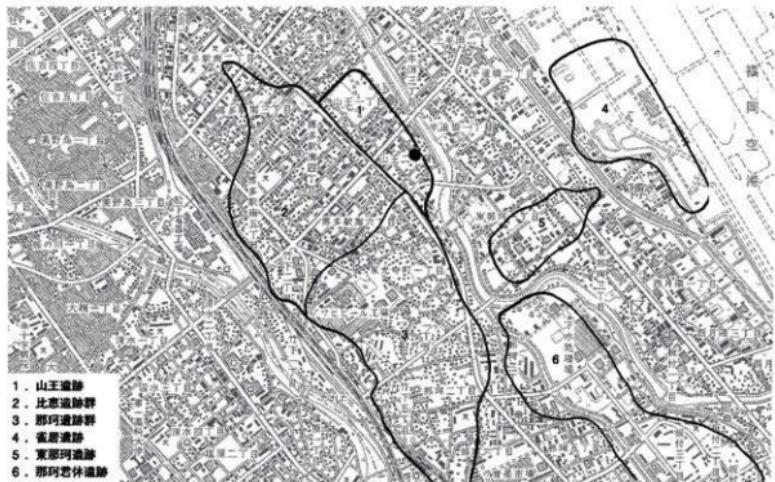
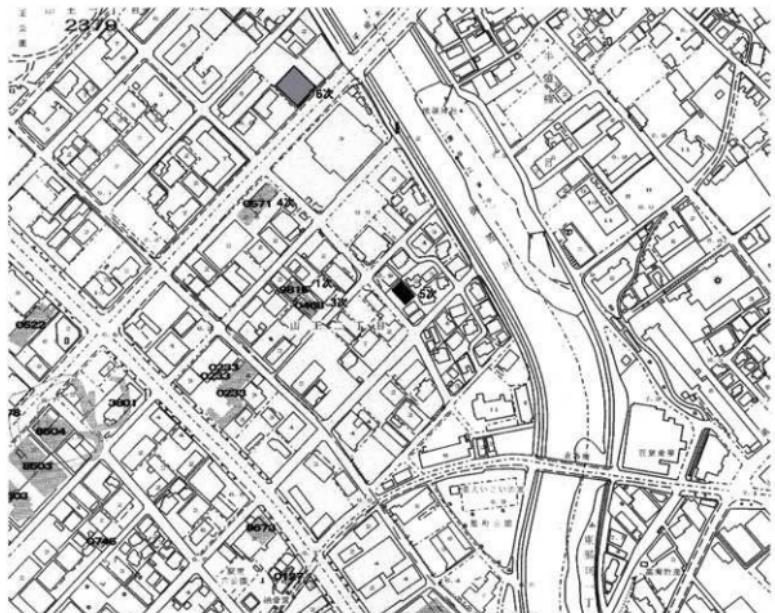


Fig.1 周辺遺跡分布図(1/25,000)



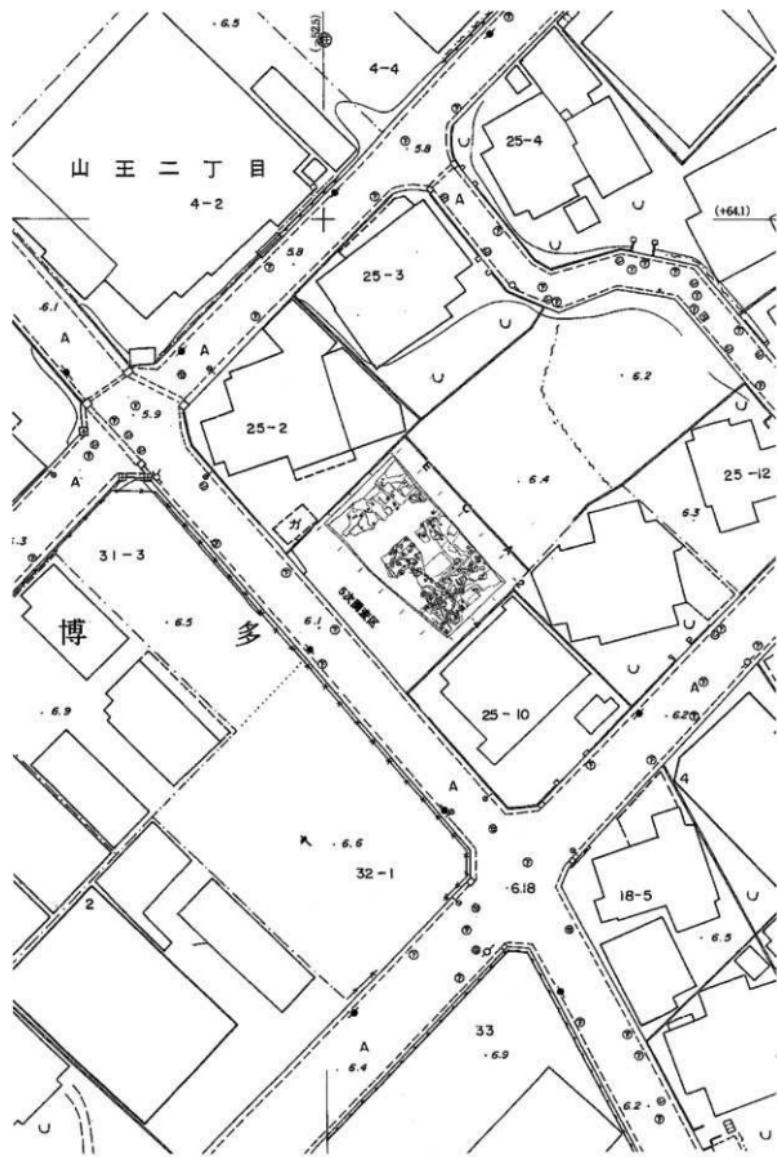


Fig.3 調査区周辺測量図(1/500)

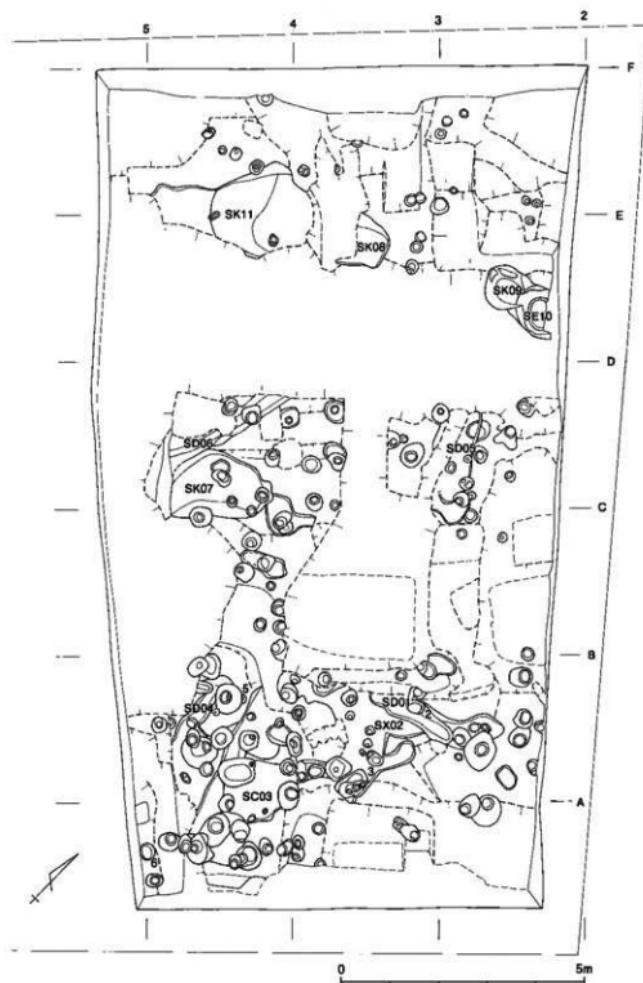


Fig.4 遺構全体図 (1/100)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

遺跡は福岡市中央に位置する福岡平野の中央部、御笠川・那珂川などの河川によって形成された阿蘇火山灰起源の低台地上に立地する。周辺には比恵那珂遺跡群・雀居遺跡など弥生時代の大集落が広がり、南西120m程には古代の官道（東門ルート）が通じる地域である。

調査区はこの山王遺跡の南東部、御笠川に近く、現地表高5.9mで、地下20cm程の阿蘇火山灰起源の鳥栖ローム上面が遺構検出面となる。

建物基礎解体時の搅乱が著しく、全容を明らかにし難いが、検出した遺構は弥生時代中期不整形土壙1基・溝1条・土壙1基、後期初頭堅穴住居1戸・溝1条・、古墳時代後期土壙1基・溝1条、平安時代末期井戸1基ほか柱穴多数を検出し、弥生時代～平安時代の集落であることを確認した。

遺物は、各遺構から弥生土器・石器・土製品・土師器・須恵器・貿易陶磁器などコンテナ3箱分を検出している。

搅乱の間際に深さ30cm程の黒褐色の包含層が部分的に遺存しており、土壙や多くの柱穴は深さ30cm程の堅穴住居の残存と考えられ、遺跡の密度は高い。また、別の柱穴の底面中央に長さ18cmの石剣切先を据えた状態で検出した。弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

平安末期の井戸は径90cmと70cmの2段掘りとなつており、検出面から深さ2.7mまで遺存する。下段の1.25m分は木桶の井筒と思われるが腐朽している。検出面より1.5m下が八女粘土との境で湧水面となる。内部より鍔付きの石鍋と丸底土師器坏を検出した。

以上、弥生時代中期前半以降を中心として、平安時代までに至る集落であり、南西の比恵遺跡群の集落に連なるものと考えられる。



Ph.1 調査区周辺(南西から)



Ph.2 調査区南部全景(南西から)



Ph.3 調査区北部全景(南西から)

2. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構は本調査区の中心をなすもので中期前半・後期初頭を主に、調査区南半部に集中する。柱穴の大部分は該期に属する。遺物は前期後半から中期後半までを含む。

1) 積穴住居SC03 (Fig.5 Ph.4~6) B4グリッドに位置し、方形プランと思われ大半を搅乱に切られ周壁は西壁が残るのみである。SX02・SD04を切っており、下面にSD04の一部が遺存する。現況で $4.5 + \alpha \times 3.0 + \alpha m$ ・深さ25cm程で、四柱式と思われ柱間で $3.1 \times 2.3m$ を測る。方位はN-18° -Wにとる。柱径22~32cm深さ45cm程。覆土は黒褐色粘質土で、上面を灰褐色砂質土の中世層が覆う。遺物は床から15cm程浮いて甕2点・壺1点の弥生土器が潰れた状態で検出された。

出土遺物 (Fig.6 Ph.8)。1は平底の短甕壺で、1/2が残存。口径13.6器高28.2cmを測る。口縁は外方に若干肥厚し2条浅い沈線を施す。口縁内外はヨコナデ・肩部外面はタテハケ後緩いナデ・内面は全面ナデ。外底脇は若干くびれる。外面鈍い黄橙色・内面橙色。胎土に粗い砂粒を多量に含む。5も同形で外面にタテハケ・内面にタテ板ナデ後指頭圧痕が残る。明黄褐色。胎土に粗い砂粒を多く赤色粒を少量含む。2~4は甕。2は口径18.2器高16.9cmを測る。如意形口縁で口唇内面が肥厚する。口縁内外はヨコナデ・胴部外面はケズリ様のタテ板ナデ・内面はナナメ板ナデ。整形は粗く、器形は前期に似るが外底脇はくびれず丸みをおびる。外面上位鈍い黄橙色・下半被熱で橙色・内面黒褐色。胎土に粗い砂粒を多量に含む。1/2が残存。3は「く」字口縁で頸部内面が稜を成す。口径21.4器高30.3cmを測る。最大径は胴中位にある。口縁内外はヨコナデ・胴部外面はタテハケ・内面はナデ。外底脇は若干くびれる。外面上位鈍い黄橙色・下半被熱で淡赤褐色・内面鈍い黄橙色。胎土に粗い砂粒を多量に赤色粒を少量含む。2/3が残存。4も同形で頸部内面が稜を成す。最大径は口縁で口径28.4cmを測る。摩滅で調整不明。鈍い黄橙色。胎土に粗い砂粒を多量に含む。6は暗緑灰色頁岩質砂岩の剥片の下線に両刃の刃部調整を行ったもので擦り切り用の石鋸の残片と思われる。幅15・厚2mmを測る。後期初頭。

2) 不整形土壙SX02 (Fig.5 Ph.4) SC03の東B3グリッドに位置し、これに切られる。周囲も搅乱に削平され全体は不明。浅い溝状遺構が組み合ったもので、5cm弱黒褐色粘質土が堆積する。遺物は少量の弥生土器片・石器が出土する

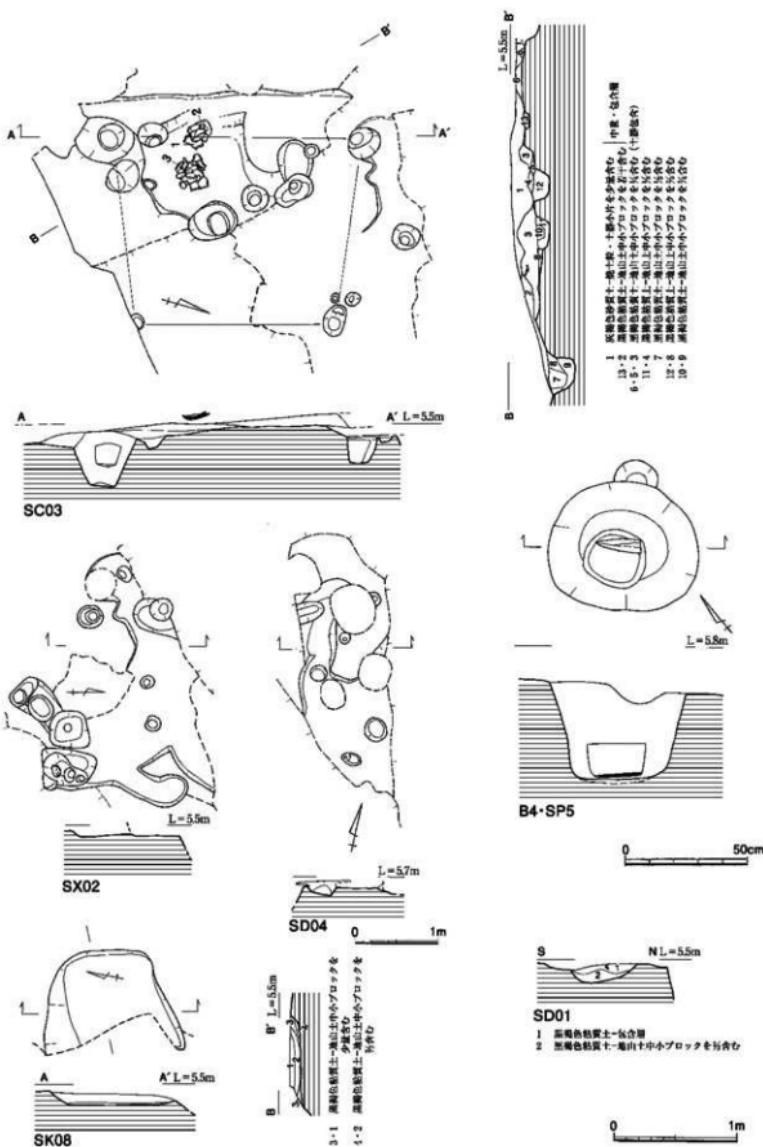
出土遺物 (Fig.6)。7は短い平坦口縁の壺で、口縁内面が段を成す。器表は摩滅し調整は不明。橙色を呈し細かな砂粒・赤色粒を少量含む。8は平坦口縁の壺で同じく調整不明。胴が張る。橙色を呈し粗い



Ph.4 SC03・SD04・SX02(南西から)



Ph.5 SC03 土層断面(北から)



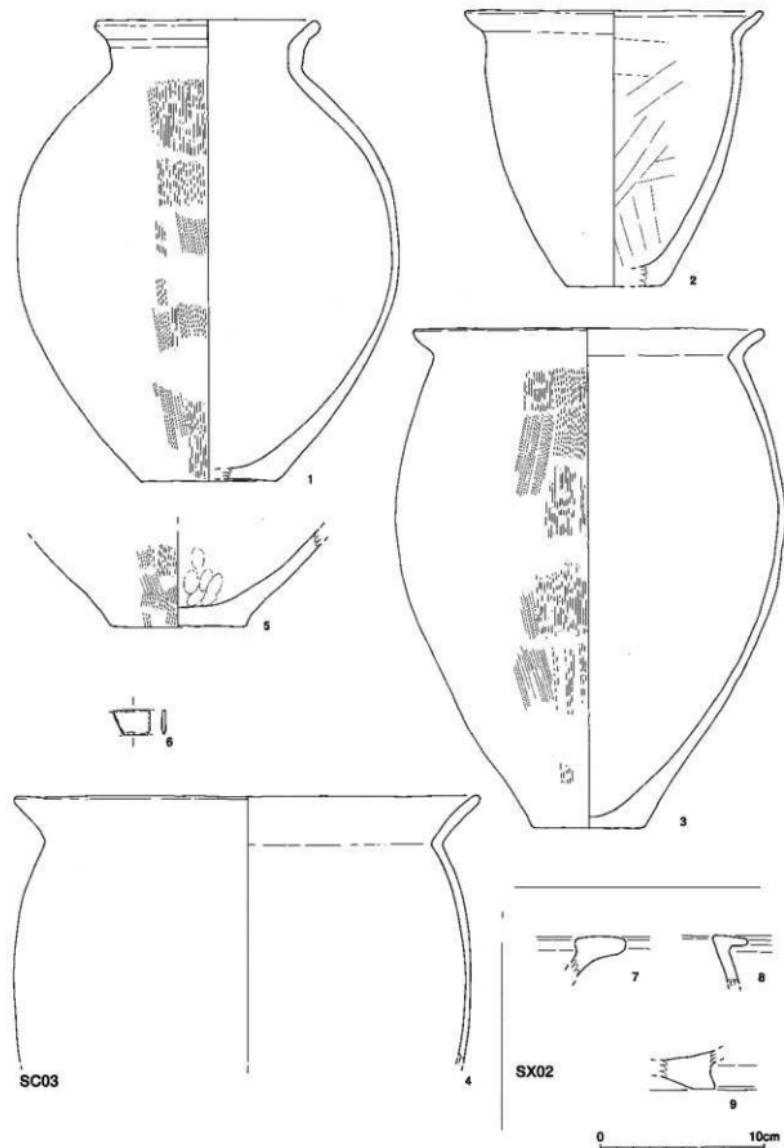


Fig.6 SC03・SX02 出土遺物実測図(1/3)

砂粒を多く赤色粒を少量含む。9は前期混入の壺底部で外底が上げ底。外面ヨコナデ。外底脇は強くくびれる。浅黄橙色。胎土に粗い砂粒をやや多く含む。中期初頭～前半。

3)溝状遺構SD01 (Fig.5) SX02の北B3グリッドに位置し、これを切る。西端は擾乱に削平され不明。幅55深さ15cm程の溝で黒褐色粘質土の覆土で下半は地山土混じりの客土で埋められる。方位をN-76° Eにとり、SC03と直交位置にあり一連の遺構の可能性もある。遺物は弥生土器小片が出土する。

出土遺物 (Fig.7)。10は屈折口縁壺で頸部内面が稜を成す。器表が摩滅し調整不明。橙色。胎土に砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。11は甕肩部片転用の土器片円盤。周縁を打ち欠きで円形に整形。径40・厚7mm・11gを測る。中期前半。

SD04 (Fig.5) SC03の西B4グリッドに位置し、これに切られる。幅50深さ5cm程の溝で南部で幅を広げ屈曲し一部がSC03の底面にのびる。周辺も擾乱に削平され全体は不明。堅穴住居の可能性も考えられる。遺物は弥生土器20数片が出土する。

出土遺物 (Fig.7)。12は鉢の小片で、外面は器表が摩滅し調整不明。内面は下半にヨコ板ナデ後ヨコナデ。浅黄橙色。胎土に粗い砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。後期初頭。

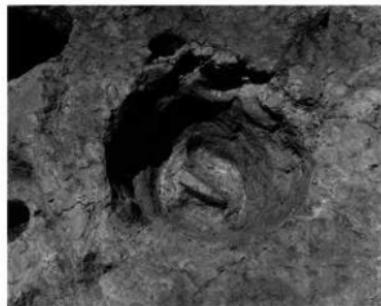
4)土壤SK08 (Fig.5) E3グリッドに位置し、西半部を擾乱に削平される。現況で92+ α ×115cm・深さ10cm程を測り、底面は平坦。覆土は黒褐色粘質土で中位に客土が成される。土器7片出土。

出土遺物 (Fig.7)。13は屈折口縁壺で頸部内面が稜を成す。器表が摩滅し調整不明。橙色。胎土に砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。中期前半。

5)柱穴出土遺物 (Fig.7 Ph.8) 14～16はA4・SP6出土。14・15は屈折口縁壺で14で口径28.2cm。内外面ヨコナデ。外面橙色で被熱で器表が爆ぜる。内面黄灰色。15は口唇を凹線器気味に仕上げ内面端部がやや突出する。器表が摩滅し調整不明。浅黄橙色。胎土に砂粒をやや多く含む。16は径22幅5.5cm程の輪を1/5程に裁断した様な土製品で、平坦な底面にスサ・粉圧痕等が残る。表面は橙色・上断面は褐灰色で、四分割した割高台状の底部と考えられる。胎土は砂粒を多く含み多孔質・軟質で鋳造の取瓶かガラス勾玉鋲型の底部の可能性が高い。中期前半。17はB3・SP3出土の壺底部。やや広めで外底をヘラナデで上げ底とする。摩滅により器表の調整不明。橙色で胎土精良。中期後半。18はB4・SP5出土石剣刃部。径24cmの柱痕跡の底面に掘えられている (Fig.5 Ph.7)。中茎が欠損し、現況で17.9×4.7×1.0cmを測る。頁岩質砂岩製で敲打により鏽を除去し平坦に仕上げ一部研磨にかかっている。前期末～中期初頭か。



Ph.6 SC03 土器出土状況(南から)



Ph.7 B4・SP5 石剣出土状況(北から)

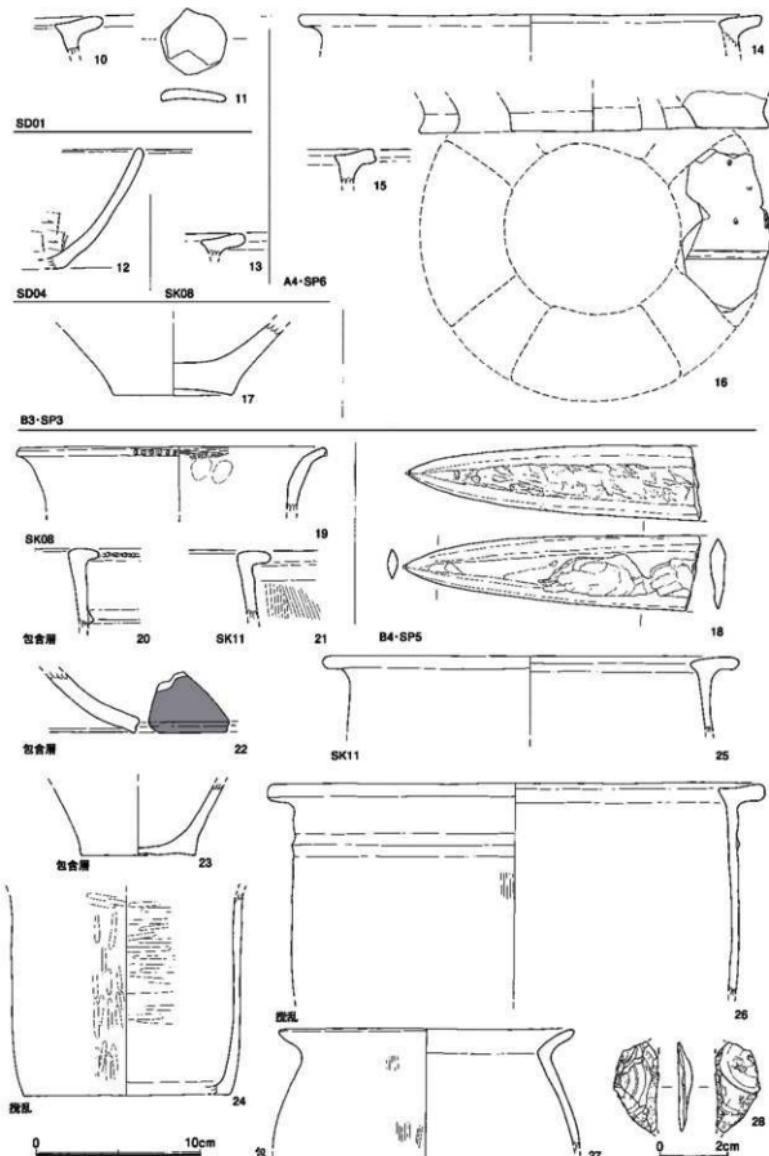


Fig.7 SD01・04・SK08 他出土遺物実測図(1/3・2/3)

6). その他の出土遺物 (Fig.7 Ph.8) Fig.7・19～28は後代の造構や攪乱等の混入遺物。19は板付ⅡA式壺。口唇下端に刻目。外面ナデ・内面はヨコハケ以下ケズリ後ナデ。外面鈍い黄橙色・内面橙色。胎土に粗い砂粒を多く赤色粒を少量含む。20は三角口縁の壺で口唇に刻目。他の調整は摩滅のため不明。胎土に砂粒をやや多く含む。前期末。21は短い平坦口縁の壺で外面はタテハケ。橙色を呈し胎土に粗い砂粒を多く含む。中期初頭～前半。22は丹塗り筒型器台の脚部。端面に凹線を施し外面は丹塗り研磨。内面は橙色を呈し胎土は精良。中期後半。23は広く薄い壺底部。摩滅のため調整は不明。外面橙色・内面黒灰色。中期後半。24は円筒形土器。平坦底部で径12.6cm。外面はタテハケ後ヘラナデ・内面ヨコハケ後ヨコヘラナデ。外面鈍い黄橙色・内面灰褐～橙色。雀居遺跡第5次調査に類例があり、半島系の可能性も考えられる。前期か。25・26は平坦口縁の壺で内面端部が若干突出する。25は口径25.4cm・摩滅で調整不明。橙色で胎土に粗い砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。26は口径30.4cm・外面頭部下に低い三角突帯を施しタテハケ調整。内面は摩滅。鈍い橙色で胎土に粗い砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。中期前半。27は「く」字口縁の壺で口径18.0cm。外面タテハケで内面は摩滅。黄褐色。胎土に粗い砂粒を多く含む。SC03出土の可能性が高い。28は黒縞石製削器で $28 \times 14 \times 4$ mmの横剥ぎ剥片の主剥面左全側と右上半に刃溝を施し、右下半が使用で刃こぼれする。晩期～弥生前期。



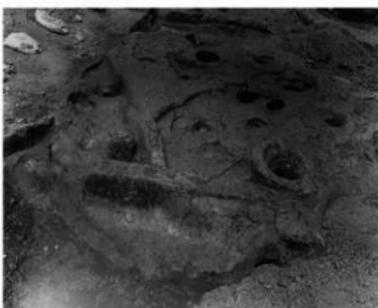
Ph.8 弥生時代出土遺物

3. 古墳時代の調査

古墳時代の遺構は中央部に溝SD06・土壙SK07の2基と若干の柱穴があるのみで、遺構は少ない。遺物も後期のみで、前期は欠落する。

1)溝SD06 (Fig.9 Ph.9・10) D4グリッドに位置、土壙SK07を切る。幅85深さ35cmを測り、方位をN-22°-Eにとり、西側で南に屈折する。覆土は黒褐色粘質土で、底面は客土される。

出土遺物 (Fig.9 Ph.14)。29は上面検出の須恵器坏蓋。口径14.4器高4.2cmを測る。天井部は右回転ヘラケズリで4本単位のヘラ記号を対面に施す。内面中央には径6cmの同心円當て具痕が残る。灰色を呈し胎土は砂粒を少量含む。焼成良好。6世紀後半。



Ph.9 SD06(左)・SK07(右・南西から)



Ph.10 SD06 土器出土状況(西から)

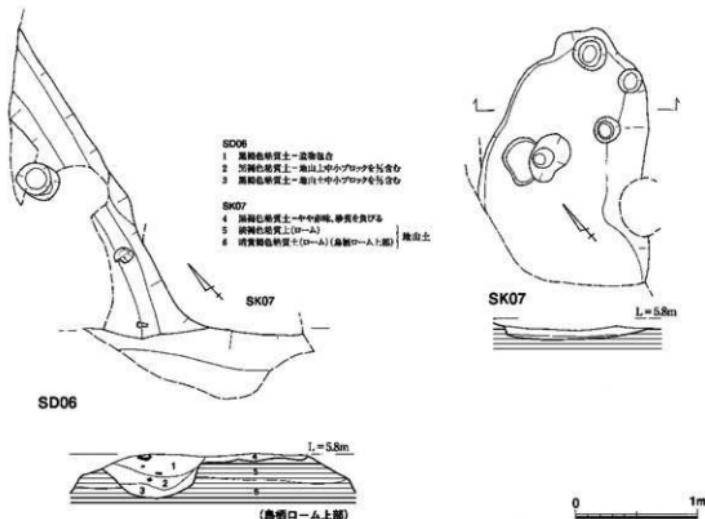


Fig.8 SD06・SK07 実測図(1/40)

2) 土壙SK07 (Fig.9 Ph.9) D4グリッドに位置し、溝SD06に切られる。現況で2.13+ α ×1.37m・深さ8cm程を測り、底面は平坦。覆土はやや砂質を帯びる黒褐色粘質土。遺物は須恵器が4片と土師器・弥生土器が少量出土する。6世紀前半～中頃。

3). その他の出土遺物 (Fig.9) Fig.9の30・31は後代の造構と検出面の混入遺物。土師器の把手。30は「く」字に屈折する口縁の頸部に貼付され、器形から移動式竈の可能性が高い。全面指頭圧とナデで整形。鈍い黄橙色を呈し、胎土に粗い砂粒を多く含む。31は直線的に上方がやや広がり、瓶の把手と考えられる。全面指頭圧とナデで整形。橙色を呈し、胎土に砂粒をやや多く赤色粒を少量含む。

4. 中世の調査

中世の遺構は調査区北半部にまとまる。検出した遺構は井戸1基・土壙1基・溝1条・柱穴若干と、古墳時代に次いで少ない。時期も中世前期でまとまる。

1) 井戸SE10・SK09 (Fig.10 Ph.11) E2グリッドに位置する。土壙SK09との切り合いととらえて掘削したが、覆土が同一であり、SK09底面の抉り込みがSE10と連結しており、同一の遺構と判断した。径90cmの主体部と径70cmの中段の2段掘りとなっており、検出面から深さ2.7mまで遺存する。主体部の下1.25m分は木桶の井筒と思われるが腐朽している。検出面より1.5m下が八女粘土との境で湧水面となっており、井筒はこの20cm下方までしか設置されず、湧水上面は汲み上げ時の水波で壁面が10cm以上抉れる。井筒上面までは黒褐色粘質土が自然に堆積し、以上は地山土混じりの灰褐色土で客土される。

出土遺物 (Fig.11 Ph.14)。32は土師器杯。内面ケンマ・外底回転糸切り。底径9cm。暗灰色で胎土は精良。33はⅡ類の銅付き滑石製石鍋。1/6が残存し、口径25.8cm。外面に煤が附着。内面ケズリ後ケンマ。



Ph.11 SE10(左)・SK11(右・北から)



Ph.12 SK11 土層断面(北東から)

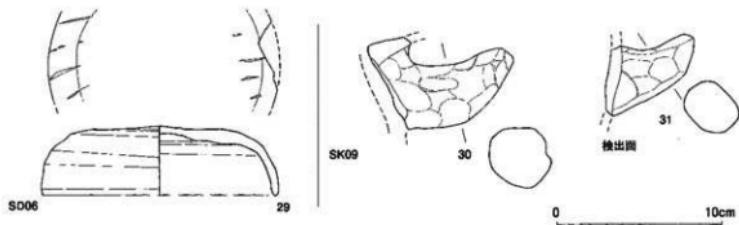


Fig.9 SD06 他出土遺物実測図(1/3)

破断面に部分的に鋸引き痕・面取りがある。34は同安窯系青磁皿。見込みに櫛描文。外底に墨書で「十口」を記す。35は白磁碗口縁片。ややオリーブがかた淡灰色不透明釉を掛ける。36は十瓶焼きの甕片。外面に斜格子叩き内面に平行當て具痕を残す。37・38は土師器塊。37は高台径7.4cm。外底に板压痕。鈍い褐色。38は高台径8.0cm。外面ヨコナデ内面にヘラ當て痕。浅黄橙色。39は口縁上面に蕭圧痕を残す土鍋。鈍い黄橙色。胎土は粗い砂粒をやや多く含む。12世紀後半。



Ph.13 SD05(北東から)

2) 土壌SK11 (Fig.14 Ph.12) F4グリッドに位置する。多くを擾乱に切られるが、現況で $3.35 + \alpha \times 20 + \alpha m$ ・深さ25cm程を測り、西部の浅く平坦な底面から径2.2m程が円形に窪む。西半部は半分程埋められ、後は自然に堆積する。

出土遺物 (Fig.11) 40は土師器皿。口径12.4器高2.5cmを測る。内外面回転ナデ・外底回転糸切り。鈍い橙色を呈し砂粒を少量含む。12世紀後半。

3) 溝SD05 (Fig.14 Ph.13) D2グリッドに位置し、幅85深さ8cmを測り、方位をN-31°-Wにとる。覆土は灰褐色砂質土が堆積する。遺物は白磁・土師器小片が出土地。

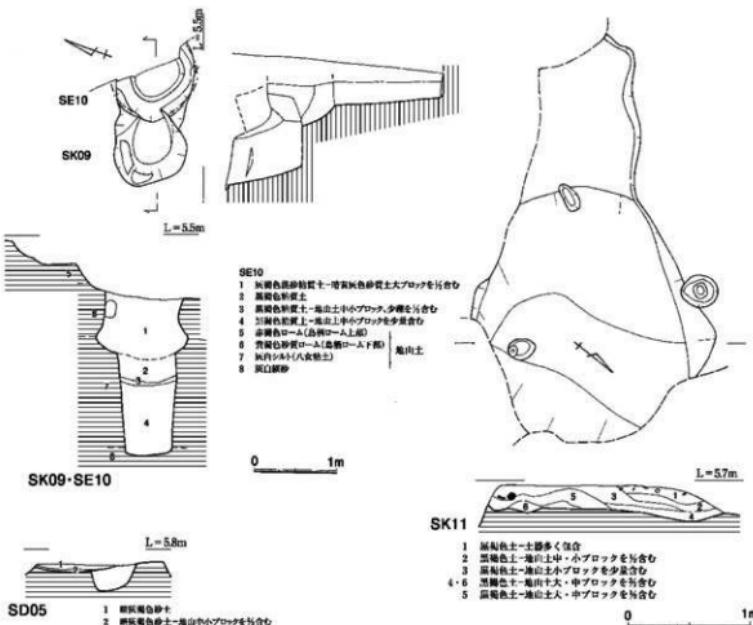


Fig.10 SE10・SK09・SK11・SD05 実測図(1/60・1/40)

出土遺物 (Fig.11) 41は白磁碗口縁片。淡灰色不透明釉を掛け細かな貫入が入る。12世紀後半。

4). その他の出土遺物 (Fig.11) 42は同安窯系青磁皿。見込みに櫛描き割花文。43は龍泉窯系青磁碗。体部内面に片切の蓮華文に雲文・見込みに印花文。釉は高台疊付けまで掛ける。44は白磁印花蓮華文皿。灰白色透明釉を外底際まで掛ける。口唇に施釉前の5mm程の切り欠き同部内面に幅2.5cm程炭化物が付着し灯明皿として使用。45は滑石製石鍋片。ひび割れを鉄鎌で固定したものでこれを底面から径7mmの鉄紙を打ってかしめる。破断面は一部面取りされる。46は鉄製刀子か。全長18.0で鎌彫れが著しい。44以外は南部擾乱・SC03上面の包含層中からであり溝が存在した可能性が高い。

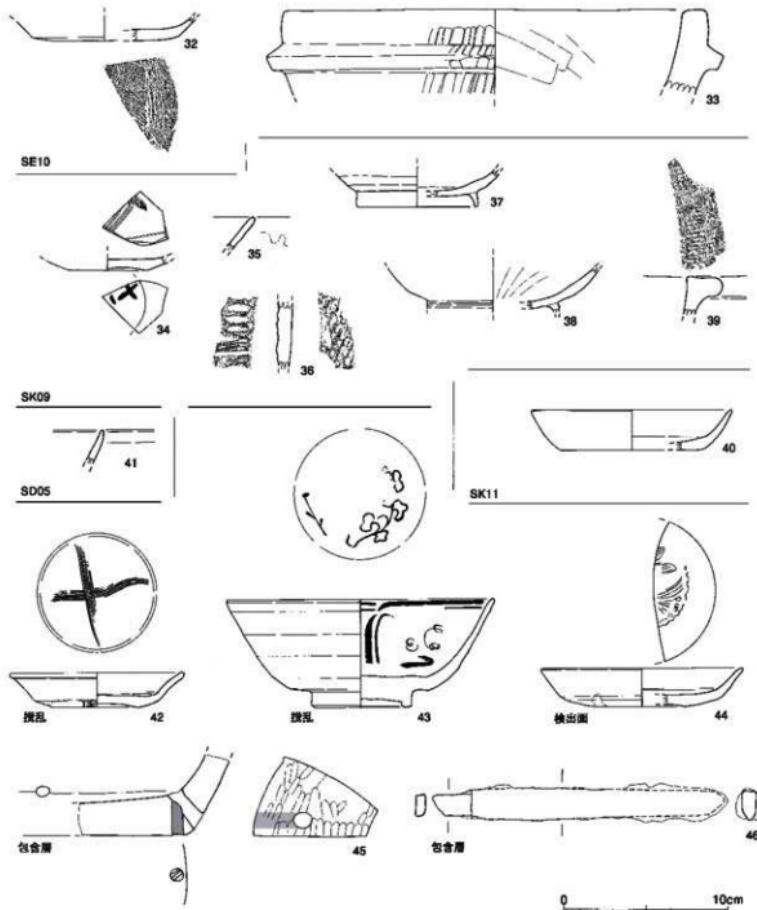


Fig.11 SE10・SK09・11・SD05 他出土遺物実測図(1/3)

III. 小結

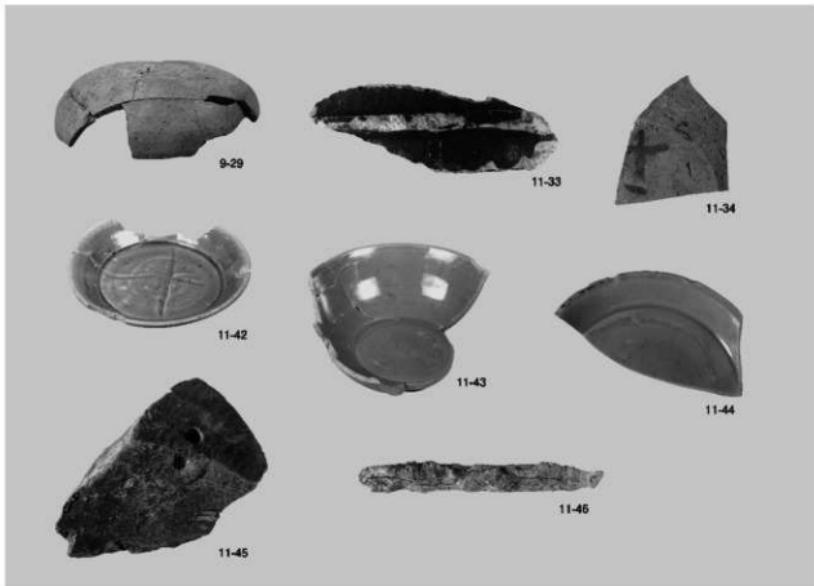
調査の結果、本調査区は遺跡の南東隅近くに位置し、全面に遺構が展開する弥生集落の中心部の一部であり、御笠川付近まで遺跡が濃密であることが確認された。擾乱がなければより明確に把握できたと思われる。

検出した遺構は弥生時代中期初頭～前半の不整形土壙1基・溝1条・土壙1基、後期初頭の竪穴住居1戸・溝1条、古墳時代後期の土壙1基・溝1条、12世紀後半井戸1基・土壙1基・溝1条ほか柱穴多数で、弥生時代～平安時代の集落であることを確認した。

遺物は、各遺構から弥生土器・石器・土師器・須恵器・貿易陶磁器などコンテナ3箱分検出した。

本調査区周辺では現在までに6次にわたる調査が実施されており、時期ごとに集落の中心が小範囲で移動していることが今回の調査を含めて明らかになりつつある。弥生時代の遺構は本調査区を含め第4・6次調査区を含む東部に広がり、西の第1・3次調査区では検出されない。前期の遺構は第4・6次調査区に中心があり、貯蔵穴・墓群が検出される。中期は本調査区の立地する南東部まで集落が拡大する。後期初頭から前半期は第4・6次調査区では遺構は認められず、南東部に中心が移行している。後期後半～古墳時代前期は逆に本調査区では検出されず、北の第4・6次調査区にまた中心が戻り竪穴住居群・掘立柱建物・溝・井戸等が検出される。古墳時代後期には西部まで集落が拡大し第1・3次調査区でも溝・土壙が検出されている。古代は全体的に希薄で、12世紀以降に中世集落が再び全域に展開するようである。

遺物としては柱穴出土の弥生中期前半・鋳造関連土製品16の出土が注目される。



Ph.14 古墳時代・中世の出土遺物

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	さんのう 山王4 山王遺跡第5次調査報告書 4 福岡市埋蔵文化財調査報告書 1076 加藤良彦 福岡市教育委員会 〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667 20100323						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 面路番号	北緯 33° 34° 45°	東経 130° 26° 7°	調査期間	調査回数 nd	調査原因
山王遺跡 第5次調査	福岡市博多区山王 2丁目25-9	40132 2379			20080709~20080808	3114	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
山王遺跡	集落	弥生 古墳 中世	縄文住居 溝 土塹 井戸	弥生土器 石器 土師器 須恵器 貿易陶磁器	弥生時代中期前半・後期初頭・古墳時代後期・中世 前期集落・弥生中期前半跡造出遭物		

山王4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1076集

2010年（平成22年）3月23日

発行 福岡市教育委員会
〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アートプロセス
〒815-0004 福岡市南区高木二丁目8番7号